「黴」の構造

――〝無技巧無解決〟の根底にあるもの――

木村東吉

1 作品の基本構造について

徳田秋声の作品「黴」は、主人公の笹村が下宿から借家に移り、そこで女主人公のお銀と出合って、彼女と事実上の家庭を持つようになってからの約六年間の家庭生活を描いたものである。そこには、世間的な意味でも家庭的な意味でも、作品を貫いて作品全体をまとめるだけの事件は、何も書かれていない。書かれているのは、徹底的に日常的なことばかりであって、描き方も思い出をたどる形で一応のまとまりはつけてあるものの、羅列的である。このため、作品の事件的筋道を求めつつ読んだ読者には、作品が何の結末も無いままに、ぽつんと途切れたように終わっているという印象を与えることになる。

けれども、このような小説の書き方には、それなりに、読者を生の現実に立ち会ったような感じにさせる効果があるのであって、これがそのまま作品の欠点になっているのではない。一般に、われわれが、われわれの周囲を取り巻く諸現象のなかに一つのまとまりを見いだすのは、われわれの知的認識作業の結果である。だから、文学作品においても、作品の中にまとまりをもって描かれた現象は、それがいかに写実的に描かれていようとも、実は生の現実そのものから見れば、その現実を知的に解釈した一つのものにすぎないということになる。そういうことに敏感な読者は、「黴」のように事件的まとまりを見い出しにくい作品に出会った時、作者によって解釈整理されたものではなく、そうしたものよりもう一段生の、流動的な現実を、作品によって呈示されたという印象を持つことになる。作品「黴」には、そうした現実の生々しさを読者に感じさせるものがあるといえよう。これがいわゆる〝無技巧無解決〟といわれた小説技法であることはいうまでもない。

それでは、この作品は思い出の羅列にすぎないものかというと、けしてそうではなく、そこには一つのまとまりがある。そのまとまりは、事件的なものでなく、心理的なものである。それは、笹村が家庭に対する願望を持つようになってから、約六年間の家庭生活を経た後、彼が家庭に対して持っていた幻想が失われるまでといったものである。このような見方は、作品の最初の方と最後の方とに、互いに対応する次のような表現があることによっても裏付けられる。

(1) 家を持つといふことが唯習慣的にしか考えられなかった笹村も、其頃半年弱の西の方の旅から帰って来ると、是迄長いあひだ厭や〳〵執著してゐた下宿生活の荒れたさまが、一層明らかに振顧へられた。彼方此方行李を持廻って旅してゐる間、笹村の充血したやうな目に強く映ったのは若い妻などを連れて船へ入込んで来る男であった。（一）

(2) （略）そして年々煩はしさの増して行く生活につれて色々に分裂してゐる自分の心持を支へきれないやうな気がしてゐた。

（略）笹村の頭には今まで渦のなかにゐるやうに思へた自分の家、家族の団欒、それらの影が段々薄くなってゐた。そして今行かうとしてゐる町の静さと自由さが、沈澱したやうな頭に少しづゝ分明してゐた。何処へ旅しても、目は始終女の影を追うてゐた七八年前の心持が、今と比べて考へられた。西の方へ長い漂浪の旅をした時は、殊に然うであった。（七十七）

引用文(1)からは、明らかに笹村の家庭に対する飢餓の気持を読み取ることができる。それが引用文(2)では、笹村にとって家庭が「渦」のように煩わしく、その中に居ては「自分の心持を支へきれないような気が」する所となっており、家庭から脱け出ることが、自由になることだと感じられているのである。ここでは、もはや彼が家庭に対して抱いていた幻想は、完全に消え去っていると見られる。

こうしたことからも、この作品の基本構造は、笹村の家庭が構成されていくところから、これが心理的な意味で崩壊していくところまでといったところにあると見られるのである。

2 心理的変化の過程について

そこで次に、笹村とお銀とがどのようにして結婚するに至り、またその家庭が、どのようにして崩壊するに至ったかを、心理の動きを中心に見ていくことにする。

作品の最初の部分に、家庭への飢餓感を持った笹村が描かれていることは、すでに述べた。そうした落ち着かない気持の笹村が、借家に移り、婆さんを雇ったことから、その娘のお銀と出会う。そのお銀は、笹村が友人と話す時、＜「ちよッと好い女ぢやないか」＞と評す程度に、彼に好印象を与える女であった。同時に、彼女は家事向きのことに役立つ女であったために、笹村の家庭に対する飢餓感を慰める存在となる。そのようなことから笹村は、お銀が家に出入りすることを許しておくばかりでなく、お銀の母が、自分の弟の臨終を見届けるために一時帰郷した時には、お銀を預かることにもなる。笹村が、お銀によっていかにその家庭に対する飢餓感を慰められていたかを示すものとしては、次のようなところをあげることができる。

(3) お銀が来るやうになってから、一々自身で台所へ出て肴の選択をする必要もなくなったし、三度々々のお菜も材料が豊かになった。是迄に味ったことのない新漬や、可也複雑な味の煮物などが何時も飯台のうへに絶えなかった。長いあひだ情味に渇いた生活を続けて来た笹村には、其が其日々々の色彩でもあった。（五）

反対に、お銀の振舞いには、ときとして女中にふさわしくないものがあって、それが笹村の気に入らないのであるが、笹村がそれ

を咎めても、お銀は素直に改めようとはしない。お銀のそうした振舞いも、けして悪意のあるものではなく、いわゆる社会的常識を破るものであるというだけである。ただ、なかには押し掛け女房を思わせる行動もある。そのようなことから、笹村は反発を覚えることもあるのだが、結果的には、お銀の行動が二人の仲を近づけることになる。たとえばお銀は、笹村の留守中に押し入れの中の物を引っ張り出して洗濯してみたり、暑いというので、笹村とへだてのない場所に自分の床をとったりする。そんなことから、二人の間に肉体関係ができてしまうのである。

やがてお銀は懐妊し、長男正一が誕生する。そこで、はじめはお銀と笹村との間を清算させる目的で仲介に入ったB―は、結局二人の間の正式な結婚を決める役割を果たすことになる。その結婚の話が決まった時の事情や笹村の気持は、次の引用文の中にほぼ集約的に表現されている。

(4) 女は笹村に対する自分の態度について反つて友人に批判を仰がうとした。夜具一つなかつた此家へ来てからの自分の骨折―笹村の可恐しい気むらな事、苦しい体をして始終質屋通ひまでしたこと、自分の手で拵へた金で、ちよいちよい笹村の急場を救つたことなどが言出された。（略）

そんな話の順序や、お銀のその時の態度は、友人の簡短な話で想像することが出来た。笹村は冷いやうな其条理だけは拒むことは出来なかつた。そして一緒になるについても不服はなかつたが、女の心持がしみじみ自分の胸に通って来るとは思へなかつた。打解けたときの女の様子や口の利方には心を惹れる処があつたが、温かい感情の融合ふやうなことは余りなかつた。笹村の頭の底には、そこに淡い不満も暗い憂愁もあつたが、今はそれを深く顧みる余裕もなかつた。（三十二）

引用文にも見られるように、二人の結婚は、親愛感とか信頼とかいった素直な愛情に基づくものではなかった。女は笹村の所帯に対して貢献してきた実績を足場として妻の座を要求し、男の方もこれを拒めないので、結婚に同意したのである。

では、女の方はなぜ笹村との結婚を望んだのかといえば、これも笹村を愛したからではない。お銀が笹村との結婚を望んだ理由は、彼女のことばで、次のように記されている。

(5) 「笹村も、私が何か欲にでも絡んで此家にゐるやうなことを始終言ひますけれど、その位なら私だつてもつと行く処もありますんです。私もこの子には引されますし、一度失敗つてもゐるものですから、今度またまごつくやうなことでもあれば、それこそ親類に顔向も出来ませんのでございます。」（三十二）

このお銀のことばによれば、子供への愛にひかれることと世間への顧慮とから、彼女は笹村との結婚を望んだのである。また、ここでお銀は笹村の家を出ても他に身を寄せることのできる場所があるかのように言っているが、それは彼女が自分の弱味を見せまいとする虚勢である。作品の他の部分に書かれていることによると、彼女が笹村の家を出た場合は、どんなことがあっても行きたくないと思う田舎の親類の家に身を寄せるか、さもなくば奈落の世界へ落ちていくかする以外に道は残されていなかった。かといって笹村の家も彼女にとっては△檻へ入れられたやうな▽気のする場所でしかなか

った。けれども彼女がここを出たとしても、もっと良い場所があるわけではなかったから、ここに落ち着こうとしたのである。だから彼女にとって、笹村との結婚は、彼女が生きていくための手段として余儀なくされたものであったということもできるのである。

このように見てくると、笹村とお銀との間には、愛情関係がまったくなかったかのようにも見えるのであるが、必ずしもそうではない。この点については、引用文(4)にも〈打解けたときの女の様子や口の利方には心惹れる処があったが、温かい感情の融合ふやうなことは余りなかった。〉といった表現があった。すなわち笹村からすると、女の表層的魅力には惹かれるものを感じているのであるが、そこからもう一段深まった愛情といったものは二人の間に育っていなかったというわけである。そして、そこに笹村は、〈淡い不満〉や〈暗い憂愁〉やを感じていたのである。

このような点だけでは、まだ彼の心理を十分にとらえたとすることはできない。というのは、笹村はお銀に対してやや異常なまでの嫉妬心をもやすのであるが、これについて筆者は、愛情のない所に嫉妬心もないはずだと考えるからである。ただ普通の嫉妬心は、愛する者が、その愛の対象を完全に独占したいと願うところから、その相手と自分以外の者との間の親しい関係に対して抱くようになる感情であるが、笹村のそれは少しちがっている。彼の場合は、むしろ嫉妬の感情を媒介として、お銀に対する関心を高めているのである。その底には、当然お銀に対する愛情が潜在しているはずであるけれども、間に嫉妬感情が介在しているために、その愛情が素直に流露せず、二人の間を結びつける力とはならないのである。このようにやや歪んだ形で笹村の愛情があるということは、後にふれる笹村の人格的特色と密接な関係がある。

それはそれとして、以上述べてきたことを要因として、二人の結婚は成立するのである。が、このような結婚そのものが、笹村にとって、彼の家庭に対して持っていた幻想を失わせる最初の段階でもあった。それは、笹村とお銀との正式な結婚の話が決まった直後の笹村の気持が、〈笹村はランプを眺めながら、舌にいら〳〵する手捲莫を喫してゐたが今日話をきめてしまったことが何となく悔いられるやうにも思へて来た。〉と記されていることからもわかる。この後悔の原因が、〈温かい感情の融合ふやうなことは余りな〉い結婚をすることになったことにあるのは、勿論のことであろう。

やがて経済的な面でも、笹村は幻滅を味わわなければならなかった。かつて、家事を切り回し家庭に潤いをもたらすお銀の能力は笹村の心を捕えたのであったが、彼女が世間体を気にすることや、彼女の肉親たちの世話までが笹村の負担としてかかってくるようになったことやのために、彼女の存在が笹村に経済的な圧迫感を加えるようになるからである。

家庭生活の経済的な面については、お銀の方でもやはり失望を感じているから、失望感は夫婦の双方にあったといえる。お銀の失望感を表わしたものとしては、次のような表現をあげることができる。

(6) 充しがたい物質上の欲求も、絶えず心を動揺させてゐた。それを踏つけやうとしてゐる良人の狂暴な手は、年々反抗しがたいものとなつた。

「子供にも然う不自由をさせず、時々のものでも着て行ければ私は他に何にも望みはない。」

お銀の然う云ふ言葉には、色の剝けて行く生活の寂しい影がさしてゐた。（七十八）

ここにはお銀の寂しいあきらめの気持が表わされている。そのあきらめの中に示された最低の願望が、子供に不自由させたくないこと、自分の着物のこととであるのを見ると、彼女の生活原理が物質上の欲望の上におかれていることがわかる。それを夫の手によって抑圧されるのであるから、お銀の失望も深かったわけである。

次に注目すべきことは、お銀の肉体的衰えである。それは、次の諸例をたどってみることによってもわかる。引用文(7)は、笹村の目に映ったお銀の第一印象を記したもの。引用文(8)は、お銀が第二子を出産した後のことを記したもの。引用文(9)は、作品も終りの部分になって出てくるもので、約六年間の家庭生活を経た後のお銀の様子を記したものである。

(7) ある日の午後、（略）帰って来ると、茶の室の長火鉢のところに、素人とも茶屋女ともつかぬ若い女と、細面の痩形の、どこか小僧気の取れぬ商人風の少い男とが、駢んでゐた、揉上の心持長い女の顔はぽき〳〵してゐた。銀杏返の頭髪に、白い櫛を挿して、黒繻子の帯をしめてゐたが、笹村のそこへ突立つた姿を見ると、笑顔で少し前みでて丁寧に両手を支いた。（三）

(8) 笹村は比較的骨格の岩丈な妻の体について、これまで病気を予想するやうなことは滅多になかつた。どうかすると鼻張の強いその気象と同じに、迚も征服しきれない肉塊に対してゞもゐるやうな気がしてゐたが、それも段々頽されさうになつて来た。（五十四）

(9) やがて下りた浅黄色の幕が落ちて、宗十郎の小西がそこへ現れて来る頃に、お銀は真蒼な顔をして、後の方へ退つて行つた。そして頭を抑へながら、苦しさうに呼吸をはづましてゐた。

「目がぐら〳〵して、わたし何だかそこらが真暗……。」

笹村の手に縋つて、廊下の方へ出たお銀は「あなた私もう駄目よ」と、泣き声を出して直にそこへ倒れてしまつた。（七十八）

引用文(7)の時のお銀の印象は、長く笹村の記憶に残ったほどで、その様子に人ずれした感じはあるが、新鮮さと健康さとを感じさせるものがある。それが引用文(8)の時になると、もはやその時のお銀のイメージは完全にこわれている。そして引用文(9)になると、健康を失って気性まで弱々しくなったお銀の姿が描かれている。

このようなお銀の変貌は、それがただちに笹村の心を彼女から引きはなすというほどのものではないが、彼女に対して笹村が感じていた魅力の一つを失わせるものであったことはまちがいない。このようにして、少しずつではあるが、確実にお銀の魅力は失われていくのである。

これはまた、お銀自身の悲哀につながるものであることはいうまでもない。たとえば、

(10) まだ〳〵先へ行けば好いこともある、さう思ひ〳〵苦しい世帯のなかを、意地を突張つて来たお銀も、体の衰へと共にもう三十に間もないことが、時々考へられた。

「己もいつまで働けるもんか。そのうちには葬られる。」

時々さう言つて淋しく笑つてゐる笹村の顔を見ると、何だ

か情ないやうな気のすることも度々あつた。（七十五）

などといった部分には、お銀の身体の衰えとともに、彼女の心にも忍び寄る不安の影が描かれている。そこには、肉体の若さを失ったことへの失望感もあるが、それとともに、夢を追い続ける力を失っていくことからくる悲哀感が深くにじんでいる。

次に、夫婦の愛情といったものは、どうなったかについて見ていくことにしよう。この点について一口でいえば、嫉妬の材料があるうちは笹村の心もお銀に向かっているが、その材料がなくなるにつれて、お銀への関心も薄れていくという経過をたどっている。たとえば次の二つの引用文を比べてみると、この関係がよくわかる。

(11) 「深山がゐさへしなければ、僕だつてお前を放抛つておくんだつた。」笹村は時々そんな事を言つた。磯谷と女との以前の関係も、笹村の心を唆る幻影の一ツであつた。（十）

(12) けれど笹村の口にする磯谷と云ふ名前が、妻に対する軽侮と冷笑よりほか、何の意味をも響をも与へない時の来たのは、そんなに長い将来のことでもなかつた。お銀がそれを言出されても、何の痛みをも感じないと同じに、笹村の方でも男が真の意味に於て自分のマツチでないことや、女が自分に値しないことの段々分明して来るのが、心淋しかつた。（七十五）

引用文(11)は、その意味するところがぼかされているのでわかりにくい点があるが、要するに、深山とお銀との間に笹村が嫉妬を感じるようなものがなかったら、笹村はお銀に対して関心も持たなかったろうという意味であり、お銀と愛しあっていたという彼女の婚約者磯谷との関係によって、笹村のお銀に対する興味がかきたてられていたというのである。

引用文(12)では、笹村の嫉妬の対象として最後まで残っていた磯谷も、実際には嫉妬するに値いしない人物だとわかるのである。この引用文で注意すべきことは、〈男が真の意味に於て自分のマツチでないこと〉と〈女が自分に値しないこと〉とが同列にならべられ、この二つのことが〈段々分明して来るのが、心淋しかつた。〉とされていることである。〈女が自分に値しないこと〉を悟った時、これを残念に思う気持は普通のものであろう。しかし、〈男が真の意味に於て自分のマツチでないこと〉を知って、これを心淋しく思うということばの裏には、嫉妬によって刺激されることを喜ぶ心があったことを示している。その嫉妬の対象が失われたと同時に、〈女が自分に値しないこと〉を悟るという笹村の心の動き方に、彼の愛の感じ方の特色がある。だから、嫉妬の対象がなくなることによって、笹村のお銀に対する関心（あるいは愛情といってもよいかもしれない）は薄れていくのである。

ただ子供に対する愛情は、夫婦の間柄とは別に、深いものになっていて、これがただ一つ、夫婦の間を間接的にではあっても結びつける力となっている。たとえば子供が病気をした場合には、その子供への愛情から、夫婦の仲も引き寄せられているからである。しかし、子供が健康を回復し、親たちの関心を集めなくなると、夫婦の仲もまたもとの状態になってしまっている。

以上見てきたことが、笹村とお銀との結婚に至るまでと、その家庭が心理的な意味において崩壊するまでのあらましである。この中で笹村の歪んだ愛の姿は、一つの特色となっている。しかし、これが作品全体の構造を左右するものにはなっていないから、作者がこ

の作品の基本構造においてとらえているものは、ありふれた家庭悲劇にすぎないといえる。ただ、その平凡な家庭悲劇を心理的側面から捕えたということが、この作品の新しさであった。またそのことは、この作品のはらんでいる問題に普遍性を加えることにもなっている

3　作品世界を特色づけるもの

しかしわれわれは、作品「黴」全体から受ける印象と、いまわれわれがとらえたところの作品の姿とを比較してみたとき、後者になお、大きな欠落があることを認めないわけにはいかない。前節において、この作品の基本構造は心理的側面からとらえられたありふれた家庭悲劇であると結論したけれども、笹村の家庭の重苦しさは、平凡な家庭に通有のものとはいえないと感じられるからである。

では、あの陰湿で重苦しい笹村の家庭の雰囲気は、何によるものなのであろうか。その原因は何であろうか。それを明らかにしなければならない。次にその点をみていくことにする。

一般的に考えて、一つの雰囲気をつくり出す要素は、大別して二つに分けることができる。一つは、人間をとりまく環境、あるいは物である。もう一つは、人間である。

人間をとりまく環境や物が、笹村の家庭の雰囲気にどのような影響を与えているであろうか。まず、その点から考えていくことにしよう。人間をとりまく環境や物といった場合には、天象に関するものから地域的状況、家屋、調度などについて考えてみればよいわけである。そうすると、笹村が借家に移り、お銀と同棲生活を始めた頃、調度の貧しいことが強調されていたことに気付かれる。たとえば簞笥が〈キイキイ厭な音のする〉ものであったとか、蒲団が〈べと〳〵になった〉ものであったとかいった表現がそれである。家屋についても、最初の借家を〈窪つためにある暗い穴のやうな家〉といい、次に移った家については、畳のじめじめするあれたような家だと説明している。こうした状態にあったことも心理的に影響するのであろうか、笹村が家庭にある時は、降る雨についてもじめじめした不快なものとして表現されている場合が多い。したがって、作品の半ば過ぎまでは、人間をとりまく環境や物が笹村の家庭に影響を及ぼして、これを陰湿で重苦しい雰囲気にしていることも十分考えられる。ただ、これらのことは、経済的な力や人の努力によってある程度まで克服することのできるものである。笹村も、彼の師であったM先生の没後、文壇における地位も進み経済的にもある程度安定してきたので、それにつれてこのような状態から脱け出しており、お銀の努力もあって、最後には彼の気に入った気持ちの良い借家に移っている。にもかかわらず、それによって笹村の家庭が明るい雰囲気を得ることはなく、むしろ荒廃の色を深めてさえいるのである。これを見ると、環境的なものも笹村の家庭に陰湿でいらだたしい雰囲気を加える一つの要素ではあっても、その中心的なものではなかったと考えるべきであろう。

人間的要素については、便宜的ではあるが、一応これを人間関係的要素と個人的要素とに分けて考えていくことにする。

笹村の家庭の雰囲気を陰湿で重苦しいものにしている人間関係的要素と考えられるものは、二つある。一つは、笹村とお銀との結婚に至るまでの反道徳的関係である。もう一つは、笹村の嫉妬心をかきたてるお銀と他の男性との関係である。

笹村とお銀との反道徳的関係が、この家庭の雰囲気を陰湿なものにする要素となっていることは事実であるが、文学作品の世界にお

いては、こうした行為があったことがそのまま作品世界を陰湿なものにする決定的要因となるわけではない。重要なのは行為の反道徳性ではなく、むしろこうした問題に取り組む時の、主人公の精神的退廃の方である。たとえ作中人物に反道徳的行為があっても、そこに精神的に緊張した何物かがあれば、読者はこれに陰湿さは感じないものである。しかし、笹村の場合はこれがない。たとえば

(13) 笹村の頭には、結婚するつもりで近頃先方の写真だけ見たことのある女や、以前大阪で知ってゐた女などの事が、時々思ひ出されてゐたが、不意に何処からか舞ひ込んで来た恁した種類の女と、濡れ合つたやうな心持で暮してゐることを、然程悔うべき事とも思はなかつた。（十）

といった部分にも見られるように、お銀との関係も〈濡れ合〉うことでしかなく、それに対しての反省も〈然程悔うべき事とも思はなかつた。〉というに至っては、精神的緊張感を感じさせるものは何もないといってよい。こうした笹村の精神的退廃が、笹村とお銀との反道徳的関係から読者が陰湿なものを感じとる真の理由であろう。とすれば、これは人間関係そのものの問題ではなく、笹村の個人的問題として考察されるべきものだということになる。

次に、笹村の嫉妬心をかきたてるお銀と他の男性との関係はどうであろうか。筆者はこれについても、結局笹村の個人的問題になってしまうものであると考えている。というのは、お銀が多くの男性と交渉を持つために、これによって笹村の嫉妬心が触発されるというのではなく、むしろ笹村の嫉妬深さから、お銀と自分以外の男性との間柄を彼がことごとく疑いの目で見ているといった傾向の方が強いからである。お銀の方にも、まったく問題がないわけではない。婚約状態にあった磯谷や、一時結婚していた栄などの異性関係がお銀の過去にあるからである。しかし、これを笹村が根に持ち続け、お銀と結婚してから数年も後になって栄の家を探し歩いたり、磯谷の手紙を探し出そうとしたりするのは、もはや普通の感覚とはいえない。また、笹村と同居していた深山、笹村とお銀との仲を精算させようと努力したKーなどは、笹村の嫉妬心の被害者といってよい。まして医者の高橋や、笹村とお銀との仲を調停したBーに対して、お銀の態度が多少なれなれしいというので腹を立てるに至っては、多少病的なものがあるといえなくもない。

そればかりか笹村には、前節でもふれたように、嫉妬心を媒介としてお銀への愛情を感じ、その嫉妬心を刺激されることを喜ぶ気持さえ動いているのである。たとえば次の例などは、そうした笹村の心理を表現したものといえよう。

(14) それでも時々笹村に身を投げかけて来るやうなお銀の態度には、破れた恋に対する追憶の情が見えぬでもなかつた。その時の女は、さう想像して見ると、笹村の目に美しく映つた。（四十五）

ここに描かれていることは、いわば退廃した美意識であるが、現実の裏側に自分の嫉妬心を刺激するものを想像した時、現実の女が美しく見えるというのである。

これらのことによってもわかるように、笹村の嫉妬をかきたてるお銀と他の男性との関係は、そうした関係そのものによって家庭の雰囲気を陰湿で重苦しいものにしているのではなく、むしろ笹村の個人的性格によって、それがことさらに重視されている傾向があるのである。

このように見てくると、笹村の家庭の雰囲気を左右しているのは、環境的要素でも人間関係的要素でもなく、個人的要素によるものであることがわかる。それもお銀の方に問題があるのではなく、笹村の方に問題があるらしいことが、ほぼ推定されるのである。なぜなら、お銀については、前節において見たように、最初は健康で新鮮なイメージを持って登場し、笹村の家庭に潤いを与える人物として描かれていたからである。品位と慎重さを欠いた蓮葉なところはあるが、陽性の性格を持った人物として造形されているのである。それがやがて、健康を失い、気の弱い女に変貌しているが、それは彼女の内部に要因があるのではないから、彼女が家庭の空気を暗いものにしているとはいえないのである。

とすれば、残るものは笹村の個人的要素しかなく、これが彼の家庭の雰囲気を決定的に左右していると見なければならない。事実においてもそうなっていることは、すでに幾つかの事例で見てきた通りである。彼は、前節で見てきたように、退廃した精神や、嫉妬の仕方においてみられたようなひねくれた性格の持主である。そればかりでなく、常に心にいらだちや懊悩を持ち続けているのである。その懊悩は、たとえば「浮雲」の文三や、正宗白鳥の作品に出てくる主人公のそれとはかなり違っており、精神的であるよりも多分に気分的であり、また生理的であるところに特色がある。次の引用などは、そうした彼の悩みの特色を表わしたものの一例である。

(15) 頭脳(あたま)が懶(だる)くなつて来ると、笹村は手も足も出なかつた。然う云ふ時には、かゝりつけの按摩に、頭脳(あたま)の砕けるほど力まかせに締つけて貰ふより外なかつた。（十八）

ここに見られるように、笹村のいらだたしい気分や懊悩は、精神的なものではなく生理的なものなのであるが、これが何かのきっかけさえあれば爆発し、夫婦の間に不和を生み出すのである。そして、時間がたって笹村の神経が自然に静まるまでは、彼の興奮を静めることはできないのである。

笹村個人に付与されたこれらの諸要素が、混然となって彼の人格を形成しているわけであるが、その人格は作品全体を通して変わることなく、彼の家庭の雰囲気全体を支配し続けているのである。

さてそうだとすると、笹村のそうした人格を形成している精神の退廃、ひずんだ性格、いらだたしい気分といったものの原因になっているものは何かということが、次の問題になってくる。こうしたものの原因として、作品中に書かれているものは、大別して三種ある。第一が環境に関するもの。第二が性病に関するもの。第三が遺伝に関するものである。

ただ、環境が笹村の精神に影響を及ぼしたとしているものは意外に少なく、重要な意味を持つものといえば、次の一カ所ぐらいである。

(15) 零落(おちぶ)れた家の後添(のちぞへ)の腹に三男として産れて、頽廃した空気のなかに生立つて来た笹村の頭には家庭とか家族とか云ふやうな観念も自(おのづ)から薄かつた。（三十五）

ここには、笹村が退廃した空気の中に育ったために、家庭や家族を重要視しない人間になったという判断が見られるが、この裏に、環境が人の思想形成に重要な意味を持つものだとする考え方があることはまちがいない。そして、ここに見られる笹村の思想は、引用文(13)に見られる彼の退廃した精神の姿と共通するものであることも見逃せない。

性病に関する表現は、あいまいにされていることもあり、当時（明治三十年代から四十年代にかけて）における性病に関する知識と現代のそれとの間にかなり差があると考えられるので、作品の表現の意図を明確に理解することが困難な点も多い。が、大体のところで、作者は性病によってむしばまれていく様を書こうとしたのではなく、性病の影におびえている一人の人間を書くことに重点を置いているようである。そのように考える理由は、次のようなところにある。

性病に関するものと判断される記事のうち、作品中最初に出てくる記事は、次のようなものである。

(16) 笹村は学校を罷めて、検束のない放浪生活をしてゐた二十時分に、ふとしたことから負はされた小さな傷以来、体中に波うつてゐた若い血が遽に頓挫つたやうな気が、始終為てゐた。頭も頽れて来たし、憐い体も次第に蝕まれて行くやうであつた。（十八）

ここに見える〈小さな傷〉というのが、性病を意味するものと考えられるのである。

二度目に性病に関するものと考えられる記事が出てくるのは、第二子が誕生した後のことで、お銀の肥立ちが思わしくないのを心配することから、笹村が考える部分である。〈笹村は自分の体を流れてゐる悪い血を、長いあひだ灑ぎかけて来たやうに思へて、可恐くもあつた。〉（五十四）というのである。この〈悪い血〉を、性病のことだと考えるわけである。

三度目に出てくるのは、作品も終わり近くなってからである。お銀がお産のたびに歯を悪くすること、目が時々霞むようになったことを記した後、〈物を食べる頃になると、子供も同じやうに齲歯に悩まされた。笹村はそこにも、自分の体を年々侵してゐるらしい悪い血を見た。〉（七十五）とある。

けれども、前の二例については、間接的にではあるが、笹村の心配が杞憂であったことが示されている。というのは、両方ともお銀の病気は回復しているからである。三番目の、お銀が歯を悪くするというのは、お産にともないがちの現象であるから、その原因が性病にあるとはいえないし、子供の歯が悪いといっても、それが性病によるものとはいえないであろう。このように見てくると、何かにつけて性病の影におびえている笹村の姿が浮かびあがってくるのである。

次に遺伝に関するものについて見ていくことにする。笹村が遺伝について考えるのは、お銀が第一子を出産する前夜のことである。それは次のように書かれている。

(17) 笹村は、不安さうに部屋を其方此方動いて居た。無事に此一ト夜が経過するか否かゞ気遣はれた。稚い時分から、始終劣敗の地位に虐げられて来た、総ての点に不完全な自分の生立が、まざまざと胸に浮んだ。それよりも一層退化されて此世へ出て来る、赤子の事を考へるのも厭であつた。（二十五）

ここに表わされている遺伝観は、〈劣敗の地位に虐げられ〉るとか、〈一層退化されて此世へ出て来る〉とかいった表現があることによってわかるように、ダーウィンの進化論的遺伝観である。そして、このような遺伝観を持っていた笹村は、作品の中で次第に自分の遺伝的資質について自覚を深めていくのである。最初は、笹村が

祖先や家柄についてほとんど関心を持たない人間であるにもかかわらず、〈自分の体質の似てゐると謂はれた母方の祖父〉についてだけは関心を持っているといった程度のものであった。やがて、子供が生れるようになると、子供への関心と重なって、彼自身の遺伝的資質への関心が強くなる。長男正一のいじけた性格が、一つ一つ笹村によく似ているため、それが彼の関心を引き付けるのである。そのようなことを表わしたものに、次のようなところがある。

(18) 母親から突放された此の幼児の廻らぬ舌で弁べることは、自分自身の言語のやうに、誰よりも一番よく父親に解つた。いら〳〵したやうな子供の神経は、時々大人を手甲摺らすほど意地を悪くさせた。（五十）

この引用文の言い回しにも見られるように、子供が意地が悪いのではなく、子供はいらいらした神経によって、意地悪くさせられているのである。そして、そのいらいらした神経は父親と共通のものである。自分に子供がよく似ていることによって、自分の遺伝的資質や性質の内容を、改めて彼は自覚させられるのである。引用文(19)は、こうしたことを表わしたものとして読めるものである。

(19) 「さうさ、体質から気質まで、正一のことは己には一番よく解る。」

そして其交感の鋭いのが、笹村に取つて脱れがたい苦痛の一つであつた。（七十三）

作品中に書かれているところの笹村の人格的特色をかたちづくっている諸要素については、見てきた通りである。ここで注目すべきことは、笹村の特異な人格について、その人格をかたちづくっている諸要素の中で、特に遺伝的資質が重視されていることである。しかも、その資質の病的なものだけを特にとりあげているのを見ると、この小説の根底にある人間観が、明治三十年代のゾライズム小説における人間観の流れを汲むものであるということがわかる。そして、環境的要素についても、その力を絶大なものと見なし、それに拮抗し得る人間の精神的力が最初から認められていない。このような考え方もまた、ゾライズムの流れに添うものであることは、いうまでもない。

笹村は、彼の家庭に対して決定的な影響力を持っていた。が、その彼もまた遺伝や環境の力にふりまわされ、性病の影におびえている運命の傀儡にすぎないのである。

このように見てくると、笹村の家庭を陰湿で重苦しいものに特色づけている主要なものは、笹村の人格的特色そのものにあり、そしてまた、笹村の人格的特色を決定している作者の人間観によるものであることがわかるのである。

4 おわりに

以上、作品「黴」の全体にまとまりをつけているものは何か。この作品を特色づけているものは何か。そこに見られる人間観はどのようなものであったか等について考察してきた。ここでもう一度、作品に描かれた笹村像を振り返ってみると、それには、笹村をたとえば明治三十年代のゾライズム小説の主人公と同じような、単なる運命の傀儡としてしまうことのできないものが含まれていたことに気付かれる。笹村は、自分を支配しているものに対して、無自覚的ではないからである。彼は一方では運命の支配のままになっているが、他方では運命の支配のままになっている自分を見つめている「自分」を持っている点に、彼は運命に支配されない自分を残して

いるといえる。そのような笹村が描かれている部分としては、次のようなところがある。

⑳ 笹村の興奮した神経は、何処まで狂つて行くか解らなかつた。如何することも出来ないほど血の荒立つて行く自分を、別にまた静かに見詰てゐる「自分」が頭の底にあつたが、それは唯見詰めて恐れ戦いてゐるばかりであつた。（六十）

これによってもわかるように、笹村は自分を支配している血の力の支配のままになりながら、その一方で、支配のままになっている自分を冷静に見つめている自分を残しているのである。このような自意識は、通常の運命の傀儡として生きる人々が持つものではない。この笹村の自意識の存在に気付いてみると、われわれが前節で見て来た笹村像は、実はこの笹村の自意識によってとらえられたものであったことがわかる。そして作品の中に、笹村の自意識によって、彼が彼自身の運命といったものを自覚していく過程が折りこまれていたことも見てきた通りである。このように自分を観察する目が、笹村の家庭のうえにも、お銀の運命のうえにも注がれるものであることはいうまでもない。

とすれば、作品の中において、観察者としての笹村の自意識はどのように働いているのか、そしてそれは、作品が思い出をつなぎ合わせた形になっているそのつなぎあわせ方とも当然関連を持ってくるはずであるが、それはどのようなものであるのか、といったことなどが次の問題となってくる。そこでは、この作品が私小説であることとからんで、秋声における私小説観あるいは小説作法などが明らかにされなければならないのであるが、これらのことについては、稿を改めて考えることにしたい。

追記　本稿は、磯貝英夫先生から懇切なるご指導を頂いてようやく成ったものである。記して深くお礼申しあげる。